

紹介

ジョン・M・キャロル著
倉田明子、倉田徹訳

『香港の歴史』

——東洋と西洋の間に立つ人々——

本書は、英語圏における最も著名な香港史研究者の一人であるジョン・M・キャロルによる概説書 *A Concise History of Hong Kong* (Hong Kong University Press, 2007) を、日本の香港研究をリードする二人が訳出した、おそらく日本語で初めてとなる香港の通史である。

二〇一四年の雨傘運動、二〇一九年の逃亡犯条例改正反対デモ（「反送中」デモ）、そして二〇二〇年の国家安全法制定と、返還二〇年を前後して香港の一国二制度は大きな転換点を迎えつつある。日本でも香港情勢は大きく報じられ、しばしば香港の歴史にも言及されるが、多くの場合それは香港が返還された一九九七年より後か、せいぜい香港返還が現実のものとなった一九八〇年代半ば以降についてであった。中国へ

の香港の返還が香港史において最も注目すべき画期の一つであることは言うまでもないが、現在の香港が様々な側面において一五〇年以上に及ぶイギリスによる植民地統治の影響を強く受けていることもまた事実である。香港の現状を真に理解するためには、植民地統治最初期からの歴史に目を向けることが重要であろう。

原著者のキャロルが第二次世界大戦以前の香港史を専門としていることもあり、本書は「はじめに、歴史の中の香港」で香港の歴史研究上の意義を説明した後、「一、植民統治初期の香港」「二、国家と社会」「三、植民地主義とナショナリズム」「四、戦間期」「五、戦争と革命」において、初期のイギリスによる植民地統治や日本による占領、そしてそれらの支配下にあった華人社会の在り方を概観している。ここで注目すべきは、華人社会におけるエリート層の台頭であろう。二〇世紀初頭以降、一部の華人商人は徐々に他の華人とは異なる独自の集団意識を形成した。彼らは多くの華人と同様に人種差別にさらされながらも、時には植民地統治に協力することで、植民地における自らの立場を確固たるものにし

ていった。「訳者あとがき」にあるような、欧米と中国の「両者に寄り添いつつ、両者と適宜距離をとり、時には両者を手玉にとる」という「香港人」の在り方の原型を、ここに見ることができよう。また、旧日本軍による占領の実態も、我々が決して目を背けることのできないものである。

「六、新しい香港」「七、香港人になる」「八、一九九七年へのカウントダウン」そして「エピローグ、一九九七年を超えて」で扱う戦後の香港史は、必ずしもキャロルの専門とするところではないものの、多くの先行研究に依拠することでこちらもまた充実した内容となっている。ここからわかるのは、キャロルの言葉を借りれば、「長い間植民地香港にはほとんど民主主義も表現の自由もな」く、「植民地統治の最後の頃まで、華人には能力がない、あるいは信頼できないとして、ヨーロッパ人が高級官僚の地位を独占していた」という事実である。昨今、イギリスによる植民地統治の遺産としてしばしば香港における「自由」と「民主」が取り上げられるが、こうした遺産についてはやはりその正と負の両面を見極める必要がある。

以上、いささか駆け足で本書の内容をまとめることとなったが、一人の香港研究者として、本書が人口に膾炙することはもちろんのこと、香港研究を志す人々の入り口となることを願ってやまない。

(B5版 四三三頁 二〇二〇年七月)

明石書店 税別四三〇〇円)

(小堀慎悟 日本学術振興会特別研究員DC2

京都大学大学院文学研究科博士後期課程)